

教育の現状を抉り、広い視野から新しい教育を考える

総合教育技術

1997



速報

『教育職員養成審議会第1次答申』

新企画スタート

子どもの心をとらえる 講話資料

特別対談

『中教審第2次答申』の
理念をめぐって

荻谷剛彦 vs 佐野金吾



特集2

「神戸小六殺害事件」14歳少年が、なぜ?

特集1

〈学級崩壊〉

反抗する子らと
揺らぐ教師たち

●「崩壊しそうな学級」をどう救うか ●〈学級崩壊〉〈荒れる子ども〉の現状 ●子どもはなぜ、荒れるのか 小林剛、子どもの「規範感覚」「価値観」は変わったのか 深谷昌志、教師たちはなぜ、「追い込まれていく」のか 近藤邦夫 ●現場からの提言／〈教師への抵抗〉にどう対するか ●学級経営論の「自明」を問い直す 浜田博文

第3回
「コンピュータ教育実践賞」の
受賞者を訪ねて⑤

教育ジャーナリスト 日向野 一生

「インターネット」を活用した相互評価の可能性を探って

神奈川県横浜市立本町小学校・出口和生教諭の実践

集中管理ではなく分散配置

横浜市立本町小学校（佐藤恭子校長・児童数四四五名）には、教室と教室の間に壁がない。昭和五十九年十月に完成した校舎は、学年ごとに学習センターと呼ぶ広いオープンスペースを有する構造で、そのオープンスペースに五台から十台のパソコンが置かれている。出口和生教諭（36歳）は同校の特徴を次のように語る。

「すべての教室がオープンな構造であり、その活用方法もオープンになるように考えられています。そのため、六千冊を超える蔵書がありながら図書館がなく、五十台を超えるパソコンがありながらコンピュータ室がありません。図書、ビデオ、パソコンなどのメディア

は、一か所に集中されるのではなく、子どもたちのすぐ近くに分散配置されています。高学年用に配置された二十台のパソコンは、インターネットつまり校内ネットワークとして活用されています。また、インターネットにも接続され、子どもたちがいつでも自由に触れることができるようになっていました」

このような環境の本町小学校では、十年前から「教わる学校、教えるやすい学校」から「学び方を学ぶ学校、学びたくなる学校」へのイメージチェンジを目指し、オープンスペースを活用した新しいタイプの授業に取り組んでいる。

相互評価をメールで送り合う

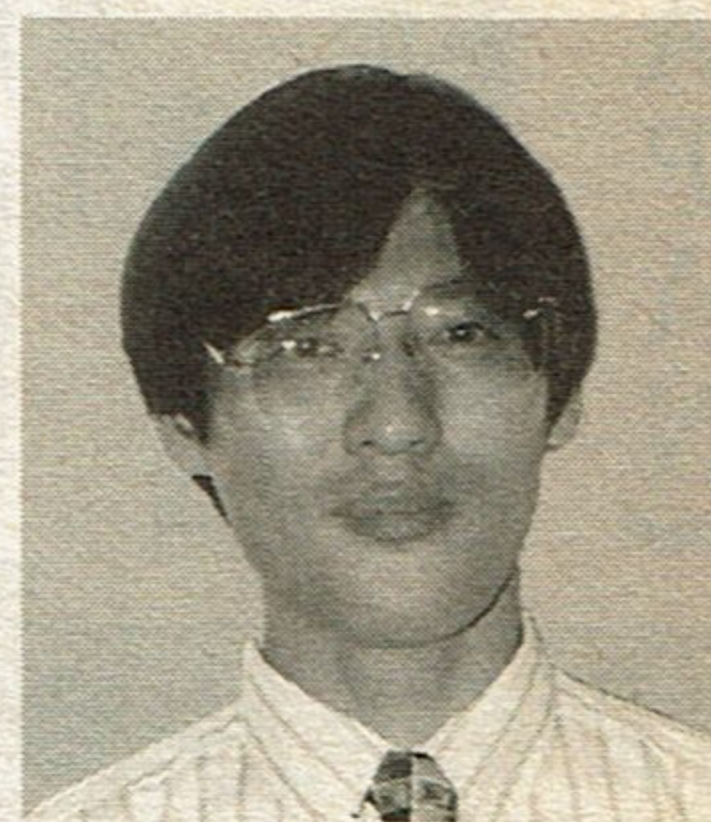
出口教諭は、昨年、六年生の国語科で新しいタイプの授業実践に

挑戦した。

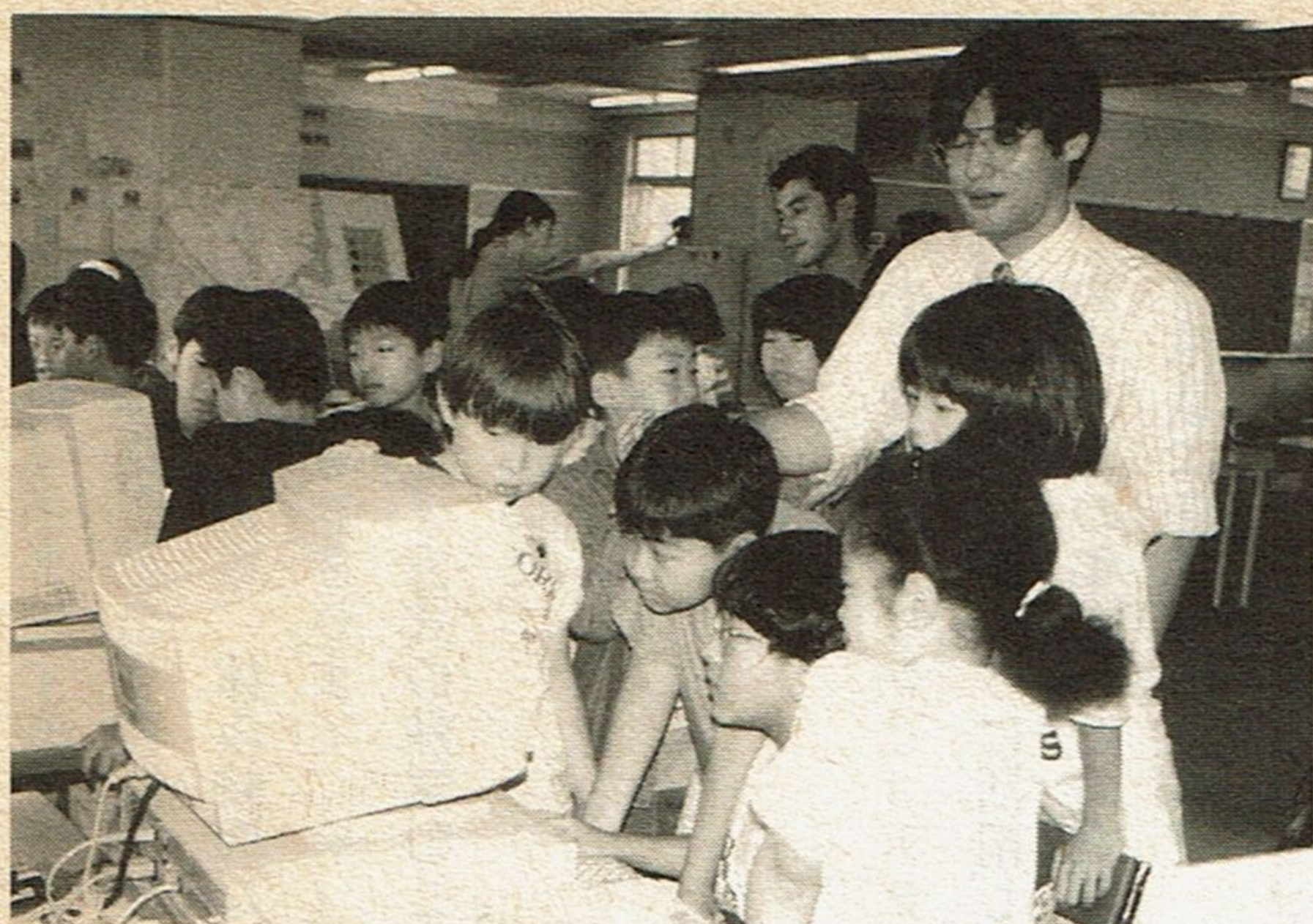
「国風文化に親しもう」の単元では、自分のつくった短歌や気に入った有名な短歌を気持ちを込めて朗読し、また、朗読する際に自己評価・相互評価を行う。

「朗読と評価をその授業だけで終わらせないで、広がりのあるものにできないかと考えました。従来は授業時間内、クラスメイトの間だけで終わっていました。コンピュータを活用すれば繰り返し聞き合うことが可能になります。さらにインターネットを活用して作品を公開すれば、学校外の人とのコミュニケーションも可能です」

と出口先生は、国語科の授業でインターネット（校内ネットワーク）、さらにインターネットをも活用した。この新しいタイプの授業



出口和生教諭



大池体験学習の思い出づくりに取り組む

は、予想以上の成果を上げた。

「子どもたちは自分の作品をインターネットで発信することを意識し、何度も推敲し、ワープロで入力、サウンド・ツールで何度も何度も、自分が満足するまで録音を繰り返ししました。限られた空間、限られた時間での発表と違って、表現に対してより一層の真剣さがみられました。さらに、自分たちの作品が文章と音声でインターネット上に公開されると、相互評価

をメールで送り合うという活動にまで発展するなど、私の予想以上の広がりがありました」

という出口教諭は、コンピュータを使った国語科学習のメリットを、「コンピュータ教育実践賞」の応募文で次のように整理している。「コンピュータを学習の道具としてとらえた場合、これまでの道具と違うメリットは次の点が大きいと考える。一つは、文字／音声／画像の複合したものを表現することができることである。もう一つは、作品を保存でき、簡単に修正したり検索したりできることである。このように考えると、推敲や朗読を重ねることによって、表現の質を高めていく学習には、コンピュータはまさにうってつけの道具であると言えることができる」

四年生の「思い出づくり」授業

本町小学校では、「オープンスペース」「コンピュータ」「校内ネットワーク（イントラネット）」「インターネット」「教科の関連」「テ

ームティーチング」などをキーワードに新しいタイプの授業を日常的に模索している。

記者が本町小学校を訪ねた日は、出口先生が本年度から担任した四年生の「横浜にある自然を体験しよう」という体験学習（大池体験学習）の翌日であった。この大池体験学習で、子どもたちは初めて集団宿泊を体験したのだという。

体験学習の翌日のため、この日は一、二時限は休みで三時限から始まった。時間割には、三時限目は「国語」、四時限目は「創意」、五時限目は「図工」とある。給食時間になるまでの三、四時限の授業を見させていただいた。

授業は四年生全クラス合同のチームティーチング方式で、授業のテーマは「思い出を残そう！」。

始業の合図で、自分の席に子どもたちが着席すると、先生が出欠を取り始める。名前を呼ばれた子の大半が、「はい元気です」と応える。なかには、「はい、すこし風邪ぎみです」と応える子もいた。出

欠が終わると、子どもたちはオープンスペースに集合。

出口先生が「今日は三、四、五時限で大池体験学習の思い出を残そう。さてどんな方法で残そうか」と問いかける。

「作文で残す」「絵にかく」「新聞にする」「紙芝居」「日記」「パソコンで打って本みたいにする」「しおりに加える」などの声にまじって、「フォトラリーの写真で残す」という声があちらこちらから。

子どもたちの発言が一段落したところで、三、四時限でフォトラリーの写真カラープリンタで印刷し、できあがったらその写真に思い出や感想文を書いて五時限目にしおりや紙芝居にしよう、と出口先生が提案する。

子どもたちは班ごとに分かれて、デジタルカメラで自分たちが撮影し、サーバーコンピュータに保存されている画像をパソコン画面に呼び出す。操作は慣れたもの。

印刷が終わった子は、自分の席にもどって文字を書き込む。印刷

したもの絵はがきにする子、先生と自分の写真を記念写真にする子、さまざまである。休み時間なしで給食時間ぎりぎりまで、チームティーチング方式の熱気のもった授業が続いた。

「ワープロ狩り」

「コンピュータ検地」

本町小学校では、コンピュータを授業のなかでどのように活用していくかは、その年度ごとの各学年担当の裁量に任されている。

そうすることで、教育課程やソフトウェアの改編にも柔軟に対応していくことができるとともに、コンピュータ活用を児童や教師に強要することなく、自由な発想のもとにコンピュータを活用した授業が展開されるであろうと考えているからである。

しかし、その一方で、小学校六年間で育成したい情報活用能力を学年ごとに分類し、児童全員がその学年のうちに習得したい能力、触れることが望ましいソフトウェア

アなどのガイドラインを設定している。教師にも、「ワープロ狩り」「コンピュータ検地」を実施していた。

「ワープロ狩り」とは、校内公文書のパソコンでの統一出力である。ワープロ専用機での入力認めるが、出力するときは必ずコンバート（データ変換）し、パソコンを使った学校のレーザープリンタでの印刷を原則としていた。しかし、

現在では「ワープロ狩り」の必要性はなくなった。全教員がパソコンを利用するようになったからである。

また、学年ごとのコンピュータ活動報告を毎学期実施している。同校では利用の仕方が偏らないようにと、「ここではこんなソフトがありますよ」「昨年はこんな実践をしていますよ」といった情報をガイドラインとして提示している。

そのガイドラインに基づいて行われるコンピュータ活用報告が「コンピュータ検地」である。この

「コンピュータ検地」も、当初の目的は達成し、イントラネット、インターネットの導入で、コンピュータ活用の幅は飛躍的に広がっている。

自由な発想のもと、コンピュータを活用する同校の実践は、今後ますます発展していくだろう。